

(様式 8)

令和元年度「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する
実践研究（高等学校）」委託業務報告書【推進地域】

番号	24	都道府県市名	三重県
----	----	--------	-----

1 推進地域における学力に関する現状

義務教育段階では、平成30年度までの全国学力・学習状況調査において、中学校国語A・B、数学Bの平均正答率が全国平均を下回っている状況が続いている。さらに、中学生の家庭学習の習慣（学習時間、復習等）についても、平日、休日のどちらも全国平均を大きく下回っている状況がある。これらのことから、特定の高等学校では、基礎学力が定着していない、家庭学習の習慣がついていない生徒が多く入学しており、高等学校入学時から中学校の学習範囲の学び直しに組織的・系統的に取り組む必要が出てきている。

高等学校の授業では、現行の学習指導要領に基づくグループで話し合う活動や、調べたことや考えたことを発表し合う活動等を重視する「言語活動」などの取組は進みつつあるものの、依然として知識伝達型の授業も見られ、学力の三要素を踏まえた指導が十分に行われておらず、全県的な取組を展開していくことが喫緊の課題となっている。

2 研究課題（令和元年度の重点課題）

本実践研究の研究課題を「オール三重で切り拓く、みえの基礎学力定着促進プロジェクト」とし、このうち推進地域では「全ての県立高等学校における、基礎学力の確実な定着に向けたPDCAサイクルの構築」に取り組んだ。平成30年度を取組を踏まえ、令和元年度は以下の3点について研究を進めた。

(1) 「みえ基礎学力UPコンソーシアム」を改編し、各校における学習・指導方法の実践、改善の取組を拡大

- ・ 昨年度まで実施してきた県事業「『学びの変革（第2期）』研究推進事業」を改め、「『学びの変革（第3期）』研究推進事業」を推進した。この事業では、これまでの課題と成果を踏まえ、主体的に学習に取り組む態度の育成を重点目標とし、「深い学び」を通じた基礎学力の定着に向け、知識の伝達に重きを置いた授業から「深く考える」授業へ転換を図るよう、「みえ基礎学力UPコンソーシアム」を組織する教員を核にしながる取組を進めた。
- ・ 「みえ基礎学力UPコンソーシアム」では、昨年度まで実施してきた国語、数学、外国語（英語）での授業改善の成果を活かし、参加する教員の募集を増やすとともに、新たに地理歴史・公民、理科でも取り組んだ。これにより、学習・指導方法の改善に向けた取組の輪を全県的に広げることができた。

(2) 「みえ科学探究コンソーシアム」を組織し、各校における探究的な学びの実践、改善を活性化

- ・ 「『学びの変革（第3期）』研究推進事業」の重点目標である、主体的に学習に取り組む態度の育成に向けて、探究的な活動により学力の育成を図ることを目的とした「みえ科学探究コンソーシアム」を新たに組織した。「みえ科学探究コンソーシアム」では、スーパーサイエンスハイスクール事業の指定校を核としながる、各校における「総合的な探究の時間」等に係る担当者等を集め、「探究的な活動に係る主担当者会議」においてその指導方法や評価方法について協議した。また、年度末には、生徒の学習の成果を「みえ科学探究フォーラ

ム」において発表することで、探究的な活動の広がり各学校での取組の支援を図った。

(3) 「高校生のための学びの基礎診断」に係る基礎学力定着に向けたPDCAサイクルの展開やカリキュラム・マネジメントの実践を推進

- ・ 昨年度整理した「高校生のための学びの基礎診断」への県立高校の関わり方やPDCAサイクルの構築に向けた支援策の整備、また、新学習指導要領として先行実施されるカリキュラム・マネジメントの推進に向けた本県独自の「学校マネジメントシステム」の活用方法を、県立高校へ示したことを踏まえ、本年度はその実践に取り組むとともに、好事例を収集した。
- ・ 各学校におけるカリキュラム・マネジメントを促進させることで、学校全体としての教育活動の改善と各教科・科目での授業改善という、大きい歯車と小さい歯車のそれぞれを噛み合わせ、県全体として大きな変革の流れを推進した。

3 研究の内容

(1) 実施体制（学力向上推進協議会の位置付けを含む）

① みえ基礎学力UPコンソーシアム

推進校、協力校、サポート校を以下のように位置付け、学力定着に課題を抱える複数の高等学校の国語、地理歴史・公民、数学、理科、外国語（英語）の教員を集めた教科別グループ（「みえ基礎学力UPコンソーシアム」）を10校で組織した。また、学力向上推進協議会にも進捗状況を定期的に報告し、指導・助言を受けながら実施した。

推進校：県立桑名北高等学校

（国語1名、地理歴史・公民1名、数学1名、理科1名、英語1名）

協力校：県立紀南高等学校（国語2名、数学2名、英語2名）

※ 国事業「教科等の本質的な学びを踏まえた主体的・対話的で深い学びの視点からの学習・指導方法の改善の推進事業」の指定校

サポート校：県立菰野高等学校（国語1名、地理歴史・公民1名、数学1名）

県立四日市四郷高等学校（数学1名、英語1名）

県立石薬師高等学校（地理歴史・公民1名）

県立亀山高等学校（理科1名）

県立松阪工業高等学校（英語1名）

県立鳥羽高等学校（数学1名、理科2名）

県立尾鷲高等学校（地理歴史・公民1名）

県立木本高等学校（英語1名）

② みえ科学探究コンソーシアム

スーパーサイエンスハイスクール事業の指定校を核としつつ、各校における「総合的な探究の時間」等に係る担当者等を集めたグループ（「みえ科学探究コンソーシアム」）を16校で組織した。

参加校：県立桑名高等学校、県立四日市高等学校、県立津高等学校、県立松阪高等学校、県立伊勢高等学校、県立上野高等学校（以上スーパーサイエンスハイスクール指定校）、県立桑名北高等学校、県立桑名西高等学校、県立四日市南高等学校、県立川越高等学校、県立神戸高等学校、県立津西高等学校、県立飯南高等学校、県立宇治山田高等学校、県立志摩高等学校、県立名張青峰高等学校

③ 学力向上推進協議会

専門的な見地から指導・助言を受けるため、学力向上推進協議会を設置し、以下の方々に依頼して実施した。

- ・ カリキュラム・マネジメントへの指導・助言
赤沢 早人（奈良教育大学次世代教員養成センター 教授）

- ・ 事業全体の検証・評価
岩崎 恭典（四日市大学 学長）
- ・ 授業改善への指導・助言
鈴木 建生（ユマニテク短期大学 学長）
- ・ 基礎学力の定着へ向けた実践事例の紹介
徳岡 卓也（株式会社ベネッセコーポレーション名古屋支社 支社長）
- ・ 事業全体の進捗管理
諸岡 伸（県教育委員会事務局高校教育課 課長）
- ・ 各取組への指導・助言
河合 貞志（県教育委員会事務局高校教育課高校教育班 指導主事）
安田 有紀（県教育委員会事務局高校教育課高校教育班 指導主事）

（２）推進校への具体的な支援・指導

県教育委員会は、推進校に対し、以下の取組の支援を行った。

① 学力向上推進協議会の開催

学力向上推進協議会を設置し、赤沢早人教授（奈良教育大学次世代教員養成センター）、岩崎恭典学長（四日市大学）、鈴木建生学長（ユマニテク短期大学）、徳岡卓也支社長（株式会社ベネッセコーポレーション名古屋支社）などの有識者から、桑北スタンダード作成や授業改善に係る指導・助言など本事業の研究・開発全般について専門的な見地から指導・助言を受け、それを基に推進校を支援した。

② 指導主事による学校訪問

研究の推進を図るため、以下のとおり指導主事による学校訪問を定期的実施するとともに、ベンチマーキング等の外部機関との連携の構築に係る支援等を行った。

- 令和元年 6 月 17 日（月） 校内研修会
- 令和元年 6 月 20 日（木） 推進協議会
- 令和元年 10 月 25 日（金） 推進協議会
- 令和元年 10 月 28 日（月） 指導主事訪問
- 令和 2 年 2 月 25 日（火） 学力向上に係るパネルディスカッション

③ みえ基礎学力UPコンソーシアム

県事業「『学びの変革（第3期）』研究推進事業」の一環として、国語、地理歴史・公民、数学、理科、外国語（英語）の教員を集めた「みえ基礎学力UPコンソーシアム」を組織し、推進校を協力校、サポート校と連携促進させるとともに、推進校教員に対する授業改善への指導・助言、教科別グループ会議の円滑な運営、学習・指導方法の研究・開発を行った。

④ 研究成果発表会の開催

令和 2 年 1 月 31 日（金）に三重県総合文化センターで、県内高等学校 14 校から 32 名が参加した研究成果発表会を開催し、県内へ普及した。

4 研究の成果、作成した成果物

（１）「みえ基礎学力UPコンソーシアム」の取組

昨年度までの成果と課題を踏まえ、主体的に学習に取り組む態度の育成を重点目標とし、「深い学び」を通じた基礎学力の定着に向け、知識の伝達に重きを置いた授業から「深く考える」授業へ転換を図るよう「みえ基礎学力UPコンソーシアム」を組織し、集まった教員を核にしながらか取組を進めた。県教育委員会が国語、地理歴史・公民、数学、理科、外国語（英語）の教員を公募し、国語 3 校 4 名、地理歴史・公民 4 校 4 名、数学 5 校 6 名、理科 3 校 4 名、外国

語（英語）5校6名で「みえ基礎学力UPコンソーシアム」を組織した。教科別協議会を国語4回、地理歴史・公民3回、数学6回、理科4回、英語4回実施し、担当指導主事のもとで相互の授業見学と研究協議を重ねた。（※ 別添資料A みえ基礎学力UPコンソーシアム実施報告書 参照）

（2）「みえ科学探究コンソーシアム」の取組

主体的に学習に取り組む態度の育成に向けて、探究的な活動により学力の育成を図ることを目的とした「みえ科学探究コンソーシアム」を組織し、各校における「総合的な探究の時間」等に係るその指導方法や評価方法（以下の①～④の項目）について、16校30名の教員で協議した。（※ 別添資料B みえ科学探究コンソーシアムにおける成果物 参照）

「総合的な探究の時間」等に係る諸課題について

- ① 「探究課題」の設定及び個々の研究テーマの設定のあり方について
- ② 探究の過程における思考力・判断力・表現力等の深め方について
- ③ 「考えるための技法」の活用について
- ④ 「総合的な探究の時間」の評価のあり方について

（3）「高校生のための学びの基礎診断」に係る基礎学力定着に向けたPDCAサイクルの展開やカリキュラム・マネジメントの実践

すべての県立高等学校が、「基礎学力定着支援シート」（右図）を活用して基礎学力の定着に向けたPDCAサイクルによる改善に1年間取り組んだ。年度の途中で、指導主事による学校訪問の際にその進捗状況を確認するとともに、年度末に今年度の取組のうちの好事例を県教育委員会が収集した。次年度以降はこの好事例を県内高等学校へ普及させる予定である。

また、各学校のカリキュラム・マネジメントの推進に向け、本県独自の「学校マネジメントシステム」を活用することを昨年度県立高校へ示したことを踏まえ、本年度はその実践に取り組むとともに、好事例を収集した。

このように、小さい歯車と大きい歯車のそれぞれを噛み合わせながら、各学校におけるカリキュラム・マネジメントを促進させることで、県全体として大きな変革の流れにつなげることができた。

	科	教科・科目	年(次)
年度初めに計画	学校としての基礎学力の定義		
	教科・科目の目標		
	指標		
	<活動指標>		
	<成果指標>		
年度の途中に計画	中間評価および改善		
年度末に計画	年度末評価と次年度に向けての改善		
	<活動指標>		
	<成果指標>		

（4）学力向上推進協議会からの指導・助言

学力向上推進協議会を6月、10月、2月に計3回開催し、本事業のめざす方向性への意見や、授業改善に向けた指導・助言をいただいた。また、指導主事が、学力向上推進協議会と「みえ基礎学力UPコンソーシアム」内の各教員をつなぎ、各教員の取組状況や研究の成果がフィードバックされるような、双方向性のある助言に努めた。

第1回 令和元年6月20日（木） 県立桑名北高等学校

内容 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善及び指導方法について

第2回 令和元年10月25日（金） 県立桑名北高等学校

内容 「桑北スタンダード」の内容検討

5 課題とその分析

(1) 「みえ基礎学力UPコンソーシアム」を改編し、各校における学習・指導方法の実践、改善の取組を拡大

コンソーシアムに参加した教員からは、取組への手応えと高い満足度が伺われた。授業に対して同じ悩みをもつ教員同士をつなげたことは、課題解決を助長し、さらなる高みを目指すことに有効であった。一方で、その成果の普及については、まだ課題が残っている。来年度からは全ての県立学校にICT整備が計画されており、ICTを活用して、授業改善をさらに促進していく必要がある。

(2) 「みえ科学探究コンソーシアム」を組織し、各校における探究的な学びの実践、改善を活性化

「総合的な探究の時間」や「課題研究」等の探究的な学習については、コンソーシアム参加校を中心に県内で大きく改善が進み、その重要性も教員間で認識されつつある。一方で、各教科・科目における探究的な学習については、依然として知識の伝達型の授業から脱却できないなどの課題が残っている。「総合的な学習の時間」等で経験した指導方法や評価方法等を活かした授業改善に、県として引き続き取り組んでいく必要がある。

(3) 「高校生のための学びの基礎診断」に係る基礎学力定着に向けたPDCAサイクルの展開やカリキュラム・マネジメントの実践を推進

各学校における基礎学力定着や授業改善などのPDCAサイクルについては、今回の事業を通じて一定前進したと感じている。一方で、学校全体として取り組む、生徒に育みたい資質・能力の育成に向けたカリキュラム・マネジメントについては、学校間の取組に差がある。今回の事業で推進校(県立桑名北高等学校)が作成した「桑北スタンダード」は、カリキュラム・マネジメントをどう進めたらよいか不安がある学校には、大きな指標となり得ると感じている。今後は「桑北スタンダード」を普及させつつ、各学校での大きな歯車を回す取組を推進させていきたい。

(4) 事業計画書における研究成果等の把握と検証の手立て

① 株式会社ベネッセコーポレーションの「基礎力診断テスト」における、各生徒の学習到達ゾーンの推移

推進校(県立桑名北高等学校)の「基礎力診断テスト」における学習到達ゾーンの推移については、昨年度に続き学年を追うごとに下位の成績層(Dゾーン)の生徒の数が減少するなど顕著な成果が得られている。県内高等学校でもその手法を取り入れ、実績が上がっている学校も見られている。

② 協力校である県立菰野高等学校が作成した「授業連携型基礎学力テスト(仮称)」を使った、推進校、協力校、サポート校での各生徒の成績の推移

昨年度作成した「授業連携型基礎学力テスト(仮称)」は、全県立学校の教員をパソコン上でつなぐ「デスクネット」内に保管し、全ての教員が活用できるよう整えた。また、今年度は同種のテストを新たに国語、地理歴史・公民、数学、理科、外国語(英語)で現在作成している。既に作成を終えて生徒にテストを実施した教員からは、「年度の前半に行った授業内容については、定着度が下がっていることなどの課題を確認することができた。」との声があった。

③ 県内の全ての高等学校でカリキュラム・マネジメントに取り組むことができる、「学校マネジメントシステム」の開発(初年度)と各校での活用(2年目)の状況

このことについては、「4(3)「高校生のための学びの基礎診断」に係る基礎学力定着

に向けたP D C Aサイクルの展開やカリキュラム・マネジメントの実践」に記載したとおりである。

④ 「みえ基礎学力UPコンソーシアム」での各校の取組状況・生徒の変容アンケート調査
コンソーシアム内の各教員が授業において生徒の変容アンケート調査を実施した。「考えることをあきらめていた生徒が、粘り強く取り組むようになった。」「グループでの活動があると、みんなに迷惑をかけないようにしっかり取り組むことができた。」などの声が聞かれた。

⑤ 「高校生のための学びの基礎診断」の活用状況

このことについては、「4（3）「高校生のための学びの基礎診断」に係る基礎学力定着に向けたP D C Aサイクルの展開やカリキュラム・マネジメントの実践」に記載したとおりである。

6 推進地域における研究成果等の今後の活用

「みえ基礎学力UPコンソーシアム」及び「みえ科学探究コンソーシアム」で得られた教員間による横のつながりを継続しつつ、次年度は授業改善を、学習評価のあり方やI C Tの活用の側面からさらに推進させていきたいと考えている。

また、カリキュラム・マネジメントの実践については、「桑北スタンダード」を活用しながら、育みたい資質・能力の育成に向けたカリキュラム・マネジメントをさらに加速させていきたい。

7 その他

本事業に関連する以下の関係資料を添付します。

- ・ 別添資料A みえ基礎学力UPコンソーシアム実施報告書
- ・ 別添資料B みえ科学探究コンソーシアムにおける成果物

(様式 9)

令和元年度「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する
実践研究（高等学校）」委託業務報告書【推進校（学校）】

都道府県市名	三重県	学校名	三重県立桑名北高等学校
--------	-----	-----	-------------

1 推進校における学力に関する現状、生徒の実態

(1) 学校の概要

(i) 学校規模

学級数：18 学級 ・ 生徒数：623 名 ・ 教職員数：80（うち非常勤講師 18）名

(ii) 沿革（学力向上に係る経過）

本校は、昭和 55 年、三重県北部の桑名市に設立された全日制普通科高等学校であり、「地域に信頼される学校」を目指し、地域社会を支える生徒を育成する教育機関としての役割を担ってきた。平成 13 年に文部科学省教育課程研究指定事業を活用して、他校に先駆けて総合的な学習の時間「みらい」の開発に取り組んだ。その後、総合的な学習の時間「みらい」から、生徒と保育園児が 1 対 1 で年間を通して交流する学校設定科目「コミュニケーション授業」を誕生させ、生徒の自尊感情の醸成に努め、道徳教育や人権教育に積極的に取り組んだ。

平成 28 年度には学力向上とキャリア教育の本格的な改革に着手し、生徒が落ち着いて授業を受けるようになったが、その際の転機となった大きな要因として、①義務教育範囲も含めた基礎学力を測る「基礎力診断テスト」を活用した学力の診断と定着を図る取組と、②3 年間を通じたキャリア教育の体系化・再構築、の 2 点があった。この診断ツールの活用成果を学力定着のための授業改善と連動させながら、いかに生徒の基礎学力の定着を図るかが課題である。

(2) 本校が平成 28 年度から取り組んだ学力定着に係る代表的な改革

(i) 「基礎力診断テスト」を活用した取組

基礎学力の定着と向上については、平成 28 年度までは、「基礎力診断テスト」を毎年 4 月に実施していたが、事前・事後指導や結果分析が十分に行われず、基礎学力の定着につながっていないという反省から、事前・事後の指導を十分に行う体制を整えるとともに、短期サイクルでの生徒の学力推移を把握し、指導改善にも生かせるよう、9 月と 1 月にも新たに実施することとした。事前指導については、「基礎力診断テスト」実施の 10 日前から 10 分間の朝学習の時間を活用し、担任と副担任がチーム・ティーチングで指導を始めた。事後指導については、「基礎力診断テスト」で下位の成績層（D3）にある生徒を対象に、校長を除く全ての教員がそれぞれ 2～3 人の生徒を受け持ち、学習チューターとして個別に指導し始めた。加えて、生徒の「やればできる」という達成感や、前向きな思いを醸成するために、表彰制度も充実させ、クラスの成績上位層への表彰だけでなく、下位層を脱した生徒への「ジャンプ賞」や、担任や学年主任からの推薦の賞を設けて表彰するなど、多くの生徒が成功体験を得られるような仕組みづくりにも配慮した。

(ii) 3 年間を通じたキャリア教育の体系化、再構築

グループワークを通してコミュニケーション能力やソーシャルスキルを身に付ける総合的

な学習の時間「みらい」を展開してきた。学校として育てたい生徒像を「社会人として適切に意思疎通を図る力を身につける」「主体的に学び続ける姿勢と力を養い、地域や社会に貢献する」と定めたうえで、「キャリア教育委員会」を立ち上げ、高校3年間を見通したキャリア教育プログラムの構築を始め、3年間のキャリア教育を体系化、再構築した。この取組が評価され、昨年度、文部科学省からキャリア教育に関する文部科学大臣表彰を受賞した。

(3) 新学習指導要領の実施に向けた取組

現在、新学習指導要領の改訂に伴い、改訂の基本方針を踏まえた3点の取組について、本事業の取組と関連づけながら注力している。

(i) 育成を目指す資質・能力の明確化

本校で育みたい資質・能力を確認し、育成を目指す資質・能力を3つの柱で整理したうえで、様々な教育内容（コンテンツ）とどのように関連づけるのかを明確にした。これにより、それぞれの教職員が日々の学習活動においてどう取り組むかが整理され、全校で取り組む体制が構築された。

(ii) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進

授業公開の振り返りや研修を通じて、すべての教員が授業改善に求められる共通のスタンダード項目を検討し、生徒と共有する授業のための基準作りに取り組んだ。

(iii) 各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進

学力定着のために必要な「PDCAサイクル」を明確にしつつ、学力向上に向けた3年間を通じた指導体制を整理し、全教員での共有を図った。

2 研究課題（令和元年度の重点課題）

本実践研究の研究課題を「オール三重で切り拓く、みえの基礎学力定着促進プロジェクト」とし、このうち本校では「基礎学力の確実な定着に向けた、学習・指導方法の開発及びPDCAサイクルの構築」に取り組んだ。具体的には以下の3点について研究を進めた。

- (1) 基礎学力の確実な定着に向けた、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善とその指導方法の開発
- (2) 「学びに向かう力」育成に向けた、教科横断的な視点からの学習方法の開発
- (3) カリキュラム・マネジメントの視点からの、基礎学力定着に向けたPDCAサイクルの構築
特に本年度は、前述の「1（3）新学習指導要領の実施に向けた取組」を重点取組とし、その取組内容をまとめた成果物「生徒と共に創る教育活動の手引き＝『桑北スタンダード』」を開発した。

3 研究の具体的内容

(1) 実施体制（学力向上推進協議会の位置付けを含む）

事業研究を実施していくうえで、これまでに既にあった委員会に加えて、外部の有識者のそれぞれの専門的役割を明記した新規の委員会を設置し、図1・2のような体制で実施した。

総合的なカリキュラム・マネジメントの推進	キャリア教育委員会 企画（戦略）委員会	・総合的な学習の時間「みらい」（みらいセミナー等） ・コミュニケーション授業等本校の特色ある教育活動等	
「学びの基礎診断」につながる基礎力診断テストの進捗管理	学力向上委員会 （基礎力診断テストの事前・事後学習、表彰、D3学習会等進捗管理、授業改善）	・「みえ基礎学力UPコンソーシアム」（学力定着に課題を抱える複数の高等学校教科別グループ）への参画等	
「授業方法」の改善等の実働組織	授業力向上研究チーム 授業公開、授業研究の実施 カレッジクラス「探究」	・授業公開、研究授業、ベンチマーキング、校内研修等 ・総合的な探究の時間に向けた先行実施	
本事業への有識者による指導・助言	学力向上推進協議会 （本事業への有識者による指導・助言）		
	名 前	所 属	役 職
	赤沢 早人	奈良教育大学次世代教員養成センター	教授
	岩崎 恭典	四日市大学	学長
	鈴木 建生	ユマニテク短期大学	学長
徳岡 卓也	(株)ベネッセコーポレーション名古屋支社	支社長	基礎学力の定着へ向けた実践事例の紹介

【図1】 桑北スタンダード作成に向けた「学力の定着と推進に関する」関係組織について

実施体制

(1) 実施体制

以下の組織体制で研究を推進する。

【図】 桑北スタンダード作成に向けた「学力の定着と推進に関する」関係組織について

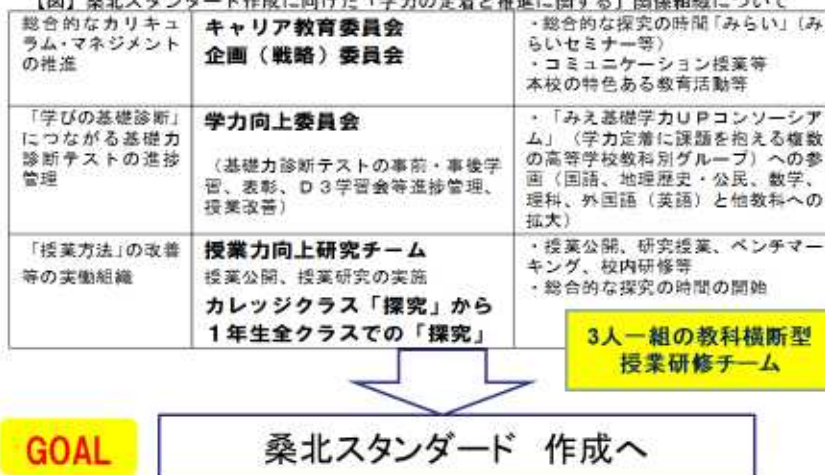


図1・2について

既存の委員会の中で、学力向上委員会が中心となり、授業力向上研究チームの中に「教科横断型の3人1組のチーム」を編成し、授業公開を繰り返した。

授業後の意見交換の中から出された授業作りのヒント集を外部の学力向上推進協議会委員からも意見を聞きながら整理し、スタンダードの中に盛り込んだ。

【図2】 実施体制の図

(2) 推進地域（教育委員会等）との連携

(i) 「みえ基礎学力UPコンソーシアム」への参加

県教育委員会が主催する「みえ基礎学力UPコンソーシアム」に、本校の国語、地理歴史・公民、数学、理科、外国語（英語）の教員が参加し、本校が目指す「桑北スタンダード」作成に向けた学習・指導方法の実践、改善に取り組んだ。

「みえ基礎学力UPコンソーシアム」では、本校が基礎学力の確実な定着に向け開発した学習・指導方法を、協力校、サポート校が、それぞれの学校でその実践に取り組むことで、学習・指導方法の改善を進め汎用性の高いものとした。

同様の課題を持つ学校が集まり、お互いの学校の授業見学を行い、意見交換をすることは、各学校での教科会を拡大する「学校を超えた教科会」として、大きな意義があった。

(ii) 教育委員会からの指導・助言

本事業を推進するに当たり、県教育委員会との連携を密にとりながら、指導主事による学校訪問やベンチマーキング等の外部機関との連携の構築に係る支援を受けた。

(3) 学力向上に向けた具体的な取組

(i) 基礎学力の確実な定着に向けた、主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善とその指導方法の開発

① 教員の授業力の向上

ア 「桑北スタンダード」の開発（別添資料1参照）

○ 現状や課題

これまでの内容中心（コンテンツ・ベース）の教育課程による教育活動では、特定の理論や概念を学習者の「頭」に入れることを教育としていたのに対して、これからの資質・能力中心（コンピテンシー・ベース）の教育では、それらを「使って」学習者自身が活動することを通じて、世界についての理解を深めていくことを主眼として求められている。特に、学力定着に課題を抱える学校では、学習者と教師とがその学校で身に付けるべき資質・能力をともに共有して、教育活動全体のカリキュラム・マネジメントを行うことが求められ、そのためのヒントとして「桑北スタンダード」を作成することとなった。

○ 「桑北スタンダード」の内容

課題① 育成を目指す資質・能力の明確化

生徒に育成を目指す資質・能力を3つの柱で再整理

⇒ 桑北スタンダード「7つの力」

- ① 桑名北高校で育みたい資質・能力、7つの力
- ② 育みたい資質・能力と新学習指導要領の「3つの柱」との関連
- ③ 多彩な教育内容(コンテンツ)と資質・能力(コンピテンシー)との関係
- ④ 資質・能力を使う時間としての多彩で多面的総合的な教育活動

課題② 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進

⇒ 桑北スタンダード「40のスタンダード項目」

- ⑦ 生徒と共有する授業のための「40のスタンダード項目」

課題③ 各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進

⇒ 桑北スタンダード「3つのPDCAサイクル」

- ⑤ 学力定着のための「3つのPDCAサイクル」
- ⑥ 学力向上のための「3年間のストーリー」

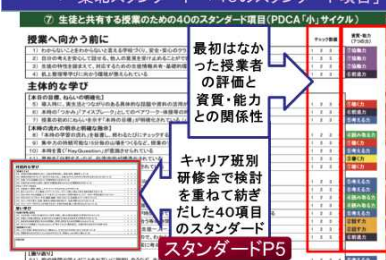
○ 検討のプロセスや改善点

外部の有識者を招聘した学力向上推進協議会及び校内の授業力向上研究チームが中心となり、全職員での授業研究と研修を重ね、桑北高校で生徒に育みたい資質・能力「7つの力」を紡ぎだし、本校の多彩で多面的・総合的な学校教育活動のすべてとの関連を明示した。

10-3 ◆育成を目指す資質・能力の明確化(新指導要領改訂の基本方針) 生徒に育成を目指す資質・能力を「3つの柱」で再整理



10-4 ◆「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進(新指導要領改訂の基本方針) ⇒ 桑北スタンダード「40のスタンダード項目」

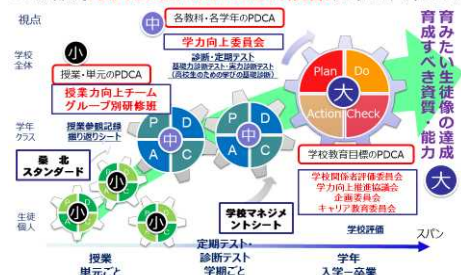


また、繰り返し校内で行ってきた授業公開研修を経て、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進のため、授業における「40のスタンダード項目」を生徒と共有しながら作成した。

そして、全職員がカリキュラム・マネジメントに参画するために大・中・小の3つの歯車からなる「3つのPDCAサイクル」を構築し、各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進のモデルとした。

基礎学力定着に向けた大・中・小のPDCAサイクルの構築

●全教職員で「小」「中」「大」それぞれのPDCAサイクルを回すカリキュラム・マネジメント



今後、多くの学校で新しい時代に必要とされる汎用性のある教育モデル「対話のツール」として活用していただけるようリーフレット形式にまとめ、県内の全ての高等学校に配付した。

- 基礎学力UPコンソーシアムのメンバーからの「桑北スタンダード」への主な感想
 - ・ 表や配置など、とても見やすくつくられており、分かりやすい。
 - ・ 生徒が身につけてほしい力がわかりやすくまとめられており、授業づくりの手助けに非常になると思う。
 - ・ 目をそむけたくくなるような項目までチェック項目があり、すごいと思いました。
- 今後の活用について

今回は、これまでの本校の歴史の中で生み出してきた多彩で多面的・総合的な教育活動、多彩な教育内容と、育成を目指す資質・能力との関係について、新学習指導要領を踏まえて整理した。今後は、本校と同様に学力定着に課題を抱える学校が集まる「みえ基礎学力UPコンソーシアム」等の場において、「桑北スタンダード」を「対話のツール」として議論しながらさらに精査し、それぞれの学校の生徒の特性や地域の実態に応じて改善したそれぞれのスタンダード、三重モデルのスタンダードへと進化させていく元となることを今後の展開として期待している。

イ 主体的・対話的で深い学びの推進に係る研修会等

○ 研修会の実施

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた学習・指導方法、評価方法の研修会を、

以下のとおり実施した。

- 6月17日(月) 森 朋子 関西大学 教授
- 10月28日(月) 小林 久哲 三重県教育委員会事務局 指導主事
- 2月25日(火) 赤沢 早人 奈良教育大学 教授

○ ベンチマーキングの実施

他校の先進事例等から学び、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた学習方法・指導方法を校内へ普及するため、以下のベンチマーキング等を実施した。

- 6月13日(木) 滋賀県立草津高等学校 滋賀県立玉川高等学校
- 1月13日(月) シンポジウム探究的学びと高大接続 順天堂大学

○ 「桑北スタンダード」との関連

繰り返し校内で行ってきた授業公開研修を経て、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進のため、授業における「40のスタンダード項目」を「桑北スタンダード」に生徒と共有しながら作成した。

○ その他

本事業により、主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善をさらに推進するため、来年度に本校とユマニテク短期大学が連携協定を締結する予定をしている。来年度以降の授業改善のさらなる推進につなげていきたい。

ウ 「みえ基礎学力UPコンソーシアム」への参加

県教育委員会が主催する学力定着に課題を抱える高等学校の国語、地理歴史・公民、数学、理科、外国語(英語)の教員を集めた「みえ基礎学力UPコンソーシアム」に本校の教員が参加し、学習・指導方法の実践、改善に取り組んだ。また、「桑北スタンダード」について、授業改善の「対話のツール」として、コンソーシアム参加校に紹介し、各教科の協議の場で活用した。

【国語】

- 第1回 9月26日(木) 場所 紀南高校
- 第2回 11月28日(木) 場所 菰野高校
- 第3回 1月9日(木) 場所 木本高校
- 第4回 1月31日(金) 場所 三重県総合文化センター

【地理歴史・公民】

- 第1回 6月19日(水) 場所 菰野高校
- 第2回 12月13日(金) 場所 三重県勤労者福祉会館
- 第3回 1月31日(金) 場所 三重県総合文化センター

【数学】

- 第1回 6月3日(月) 場所 菰野高校
- 第2回 9月17日(火) 場所 四日市四郷高校
- 第3回 9月27日(金) 場所 桑名北高校
- 第4回 10月25日(金) 場所 紀南高校
- 第5回 11月8日(金) 場所 鳥羽高校
- 第6回 1月31日(金) 場所 三重県総合文化センター

【理科】

- 第1回 6月27日(木) 場所 桑名北高校
- 第2回 10月7日(月) 場所 鳥羽高校

- 第3回 1月23日(木) 場所 亀山高校
 第4回 1月31日(金) 場所 三重県総合文化センター

【英語】

- 第1回 6月21日(金) 場所 松阪工業高校
 第2回 10月29日(火) 場所 四日市四郷高校
 第3回 1月27日(月) 場所 紀南高校
 第4回 1月31日(金) 場所 三重県総合文化センター

② 思考力・判断力・表現力等を向上させる取組の開発と蓄積

○ 学力向上委員会

知識・技能の習得をさらに強固なものとし、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」を育むための授業での発問や指導方法、また、試験問題等の作成を通じた評価方法の確立を、「学力向上委員会」を中心に取り組んだ。

学力向上委員会 授業力向上研究チーム

- 第1回 5月15日(水) 第2回 6月17日(月)
 授業公開 9月20日(金)

○ 「桑北スタンダード」との関連

生徒に育みたい資質・能力の1つとして、「聴く力、話す力、書く力」及び「読み取る力、考える力」として整理し、各教科において特にどの力の育成を目指すのか、また、各教育活動においてもどの場面で育成するのかについて、「桑北スタンダード」に整理し、全校で取り組んだ。

(ii) 「学びに向かう力」育成に向けた、教科横断的な視点からの学習方法の開発

① 家庭学習につながる生徒の主体的な学習方法の研究

家庭学習を定着させる仕組みを「授業力向上研究チーム」で検討してきたが、現時点では授業に対して生徒が積極的に取り組むことを優先すべきであり、そのためにはまずは教員が授業改善にしっかり取り組むべきであると整理した。現在の取組が根付いたのちの今後の発展課題としたい。

② 総合的な「探究」の時間の開発

総合的な探究の時間「みらい」の取組の中で、探究的な学習を深化させる取組「探究」を新たに開発した。キャリア教育に軸をおいた探究課題を設定し、自ら課題を見つけ地域の課題やSDGs等国際社会の課題と連動させるなどの教科横断的な視点から、新たな総合的な探究の時間「みらい」の開発に取り組んだ。また、2学年カレッジクラスでの総合的な学習の時間では、新たに「カレッジ探究」として探究活動に取り組み、探究の成果を発表会で発表した。さらに、「教頭先生の学校と企業をつなぐSDGsコーナー」を設置し、総合的な学習(探究)の活動の一助とした。

③ 教科横断的な活動における「学びに向かう力」の育成

生徒に育みたい資質・能力の1つとして、「前に踏み出す力、協働する力」として整理し、各教科において特にどの力の育成を目指すのか、また、各教育活動においてもどの場面で育成するのかについて「桑北スタンダード」にまとめ、全校で取り組んだ。

④ 学校法人暁学園四日市大学と本校との連携協定の締結

本事業を通じて、本校生徒と四日市大学の学生が交流しながら、地域課題の解決のための学びを深めたり、互いに連携した防災活動に取り組むための連携協定を締結した。このことにより、今後本校の探究的な学びをさらに深めていくことができる。

(iii)カリキュラム・マネジメントの視点からの基礎学力定着に向けたPDCAサイクルの構築

基礎学力定着に向けたPDCAサイクルを以下のとおり3つに整理して、全教職員でカリキュラム・マネジメントに取り組む体制を構築した。

- ① 最も基本となる小サイクルは、授業を軸とした教科担当者のPDCAサイクルとなる。「桑北スタンダード」に集約される本校の学びのスタイルの実施と評価、改善を担う。授業力向上研究チームによる授業公開研修等、最も基礎となるサイクルである。
- ② 中サイクルは、「学びの基礎診断」等の評価テストを実施・運営する各学年のPDCAサイクル、学力向上委員会による基礎力診断テストの事前・事後学習・表彰・学習会等の進捗管理を行うサイクルとなる。
- ③ 最後の大サイクルは、学校組織全体のマネジメント、企画（戦略）委員会、キャリア教育委員会と学力向上推進協議会、学校関係者評価委員会等外部有識者による学校経営全体の進捗管理PDCA、事業報告及び学校マネジメントシートでの進捗管理を行うサイクルとなる。

基礎学力定着に向けた大・中・小のPDCAサイクルの構築

● 全教職員で「小」「中」「大」それぞれのPDCAサイクルを回すカリキュラム・マネジメント



【図3】基礎学力定着に向けた大・中・小の3つのPDCAサイクルについて

また、桑北スタンダードは、生徒に育成を目指す7つの資質・能力を3つの柱で再整理し、その資質・能力を、各教科・科目での学習や多彩な教育内容と関連づけて育成を図っていることから、桑北スタンダードを実行していくことが、カリキュラム・マネジメントの推進に深くつながっていると考えている。これからも大・中・小の3つのPDCAサイクルを回しながらスパイラルアップを十分に図っていきたい。

(4) 検証の手立て

以下の(i)～(viii)の方法で事業成果を検証した。

- (i) 「基礎力診断テスト」における、生徒の学習到達ゾーンの推移
- (ii) 主体的・対話的で深い学びの推進に係る研修会での教員対象のアンケート結果での自己評

価の状況

- (iii) 校内における生徒・保護者対象の授業アンケートの満足度の状況
- (iv) 「桑北スタンダード」の開発
- (v) 「みえ基礎学力UPコンソーシアム」への本校教員の取組状況及び生徒の変容アンケートの結果
- (vi) 生徒の学習状況に関するアンケートでの家庭学習の取組状況の推移
- (vii) 基礎学力定着に向けたPDCAサイクルの構築
- (viii) 学力向上推進協議会からの評価

4 研究の成果、生徒の変容

前述の「3(4) 検証の手立て」にあげた各項目については、以下のような成果や変容が見られた。

(i) 「基礎力診断テスト」における、生徒の学習到達ゾーンの推移

昨年に引き続き、低学力層の生徒数の減少等に顕著な成果が現れている。「D3学習会」等のテスト前後の事前・事後の生徒個々への丁寧な指導により、昨年度はD3ゾーンの生徒数が過去最少を記録し、1年生ではCゾーン以上の割合が50%を超えた。今年度も昨年に引き続き、D3ゾーンの生徒数が過去最少を更新するとともに、Cゾーン以上の生徒数も過去最多となった。

(ii) 主体的・対話的で深い学びの推進に係る研修会での教員対象のアンケート結果での自己評価の状況

国事業の実施前と比較して、主体的・対話的で深い学びについて意識して取り組めた教員の割合をアンケート調査したところ、「かなりそう思う」と「そう思う」の割合は63.3%であった。多くの教員がこれまでの指導方法から、主体的・対話的で深い学びの推進に向けた指導方法へ改善しつつある一方で、従来の授業を変えることへの不安を抱えている教員も未だ一定数いることが分かった。

(iii) 校内における生徒・保護者対象の授業アンケートの満足度の状況

生徒に行ったアンケートでは、「中学校の授業と比べて、高校の授業について学びやすいと思いますか？」の問いに対して、「かなりそう思う」20%、「そう思う」48%、「あまりそう思わない」24%、「そう思わない」7%であった。また、保護者に行ったアンケートでは、「お子さんは授業がわかると感じていると思いますか？」という問いに、「かなりそう思う」8%、「そう思う」60%、「あまりそう思わない」28%、「そう思わない」4%であった。アンケート調査の結果、多くの生徒や保護者は授業へ満足している状況が見られ、授業改善に向けた取組が有効であったことが伺える一方で、満足できていない生徒が多くいる授業も一定数あることが分かり、今後も「桑北スタンダード」を生徒と共有しながら授業改善に努めていきたい。

(iv) 「桑北スタンダード」の開発

別添資料1のとおり開発し、リーフレットにまとめた。

(v) 「みえ基礎学力UPコンソーシアム」への本校教員の取組状況及び生徒の変容アンケートの結果

本校教員に行ったアンケート項目「コンソーシアム等への参加や情報等により授業改善に取り組めた」の割合は、「かなりそう思う」と「そう思う」の合計の割合が76.4%であった。また、コンソーシアム内の各教員が授業において生徒の変容アンケート調査を実施した中からは、「考えることをあきらめていた生徒が、粘り強く取り組むようになった。」、「グル

ープでの活動があるとみんなに迷惑をかけないようにしっかり取り組むことができた。」などの声が聞かれた。

(vi) 生徒の学習状況に関するアンケートでの家庭学習の取組状況の推移

家庭学習を定着させる仕組みを「授業力向上研究チーム」で検討してきたが、授業に対して積極的に取り組むことを現時点では優先すべきであり、学校内での学習の充実に向けて教員は授業改善に取り組むべきであると整理した。現在の取組がしっかり根付いたのちの発展課題としたい。

(vii) 基礎学力定着に向けたPDCAサイクルの構築

「3(3)(iii)カリキュラム・マネジメントの視点からの基礎学力定着に向けたPDCAサイクルの構築」で記載したとおり、今年度に「桑北スタンダード」にまとめ、全教職員で取り組むための仕組みを構築した。

(viii) 学力向上推進協議会及び学校関係者評価委員会からの評価

学力向上推進協議会の委員からは、「桑北スタンダード」及び本事業への様々な取組について高く評価をいただいた。特に、生徒の姿を中心にした実践であったことや、生徒とともに創るという視点から「桑北スタンダード」を作成したことなどが高く評価された。

5 課題とその分析

(1) 「基礎力診断テスト」と授業での学力向上の連動

昨年度の課題では、これまでの「基礎力診断テスト」を活用した取組の成果から、低学力層の減少等顕著な成果が現れてきた一方で、日々の授業の中でいかに学力向上を図っていくかが課題であった。学力向上推進協議会の委員からも「Dゾーンの生徒の学力を上げるためには個別指導が有効だが、Cゾーンの生徒の学力を上げるためには、授業改善による組織的な取組が必要」との助言を受けていた。今年度は、授業力向上委員会のメンバーによる研究授業の拡大・充実に加え、授業を変えることへの不安を抱えている教員の意識の変容を図るよう、県内の「みえ基礎学力UPコンソーシアム」に参加している教員を核とした学校全体での組織的な授業改善の取組を進めたことで、一定不安を抱えている教員をサポートすることができた。今後も引き続きオール桑北で授業改善に取り組んでいきたい。

(2) 「みえ基礎学力UPコンソーシアム」における他教科への広がり

昨年度の課題として、「みえ基礎学力UPコンソーシアム」の取組が国語・数学・外国語(英語)の3教科だけであることから、取組に広がりがないという課題があった。今年度は県教育委員会と協議し、3教科に加え、地理歴史・公民、理科を加え5教科で実施した結果、アンケートにおいて「コンソーシアム等への参加や情報等により授業改善に取り組めたか」の問いに対し、「かなりそう思う」と「そう思う」の割合が76.4%にのぼり、「みえ基礎学力UPコンソーシアム」での取組が本校の授業改善により影響を与えた。今後は5教科で蓄積された授業改善へ取り組む意欲や具体的な手法を、「桑北スタンダード」を活用しながら全ての教科に広げていく必要がある。

(3) 家庭学習の定着に向けた取組の推進

家庭学習を定着させる仕組みを「授業力向上研究チーム」で検討してきたが、現時点では授業に対して生徒が積極的に取り組むことを優先すべきであり、そのためにはまずは教員が授業改善にしっかり取り組むべきであると整理した。現在の取組が根付いたのちの今後の発展課題としたい。

(4) 「桑北スタンダード」の活用

学力向上推進協議会から、「桑北スタンダード」が絵にかいた餅にならないよう、PDCA

サイクルをしっかりと定着させること、今いる教職員についてはスタンダードの理念が浸透しているが、これから新しく赴任してくる教職員にはどのように引き継いでいくのが課題となると助言いただいた。また、「桑北スタンダード」の県内外への水平展開については、県教育委員会にお願いしたいとの意見もあった。次年度以降もしっかり活用していく必要がある。

(5) 探究的な学び

探究的な学びについては、それらがややもすると教員が主導しすぎてしまい、生徒が「受け身」になってしまうことが、本事業を通じて再確認できた。本校教育活動の強みである「生徒と共に創る」という姿勢を大切に、探究における生徒の「オーナーシップ」や当事者意識を高める工夫を行っていきながら、伝統の総合的な学習の時間「みらい」を総合的な探究の時間「みらい」としていきたい。また、四日市大学と本校との連携協定を活用しつつ、これまで実施してきたインターンシップと関連付けて、実習先での課題やそこから見える地域課題に目を向け、探究を深めていくことを想定している。

6 今後の取組（予定）

2年間の事業のまとめとして、令和2年1月31日に三重県教育委員会が主催した報告会とは別に、令和2年2月25日に、学校独自の本事業のまとめとしてシンポジウムを開催した。シンポジウムでは、本事業に指導・助言いただいていた学力向上推進協議会の委員から、講演及びパネルディスカッションのパネリストをお願いした。このシンポジウムには県外からも多数の参加があり、新学習指導要領時代における授業改善に係る「対話のツール」として「桑北スタンダード」が活用できることをこの場で確認することができた。

パネリストである推進協議会委員からは、地に足のついた生徒目線のスタンダードが作成できたこと、教育活動を「生徒と共に創る」という学校の一貫した姿勢を感じたことなどの他、制作した「桑北スタンダード」を如何に活用するか、また、生徒版の「桑北スタンダード」の作成や生徒版のアクティブ・ラーニングへの取り組み方と言った視点、持続可能な組織改善や生徒の変容の姿を一層しっかり見ていくことが大切であることが指摘された。

このことを踏まえ、今後さらに桑名北高校の学びが深化するよう、取組を継続・発展させていきたい。

7 その他

別添資料として以下のものを提出いたします。

- ・ 別添資料① 「桑北スタンダード」（リーフレット）
- ・ 別添資料② 「研究成果報告書」